

第八節 高磯山崩壊

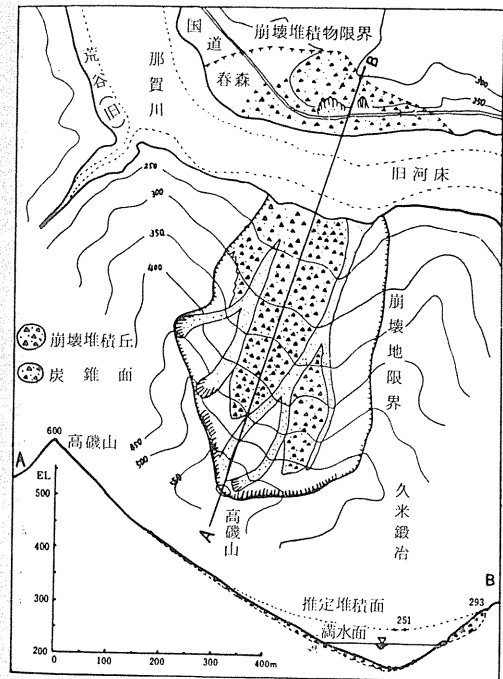
明治二十五年(一九〇二)七月二十五日、那賀川中流右岸に発生した高磯山の崩壊については、寺戸(一九〇〇)の報告がありそれに基づいて述べる。

1 崩壊の状況

高磯山(六一一呎)は上那賀町大戸(当時は海部郡下木頭村大字大戸村)にあり、崩壊は台風通過に伴う暴風雨を誘因として発生した。以下、日を追って記述する。

七月二十二日、徳島市で小雨、羽ノ浦町で微雨であるが、上流の降雨により、那賀川は増水していた。七月二十三日、台風高知市に上陸し徳島市二一一・二蕨の降雨。七月二十四日、県内は終日暴風雨、徳島市の降雨二四五・八蕨なので、高磯山付近では、三日間で七〇〇〜一、〇〇〇蕨以上の降雨があったと推測される。

那賀川は増水し、鶯敷町では平水より七・五呎(二丈五尺)増、羽ノ浦町では三・六呎(一丈二尺)を記録した。夜、高磯山南東の久米鍛冶が崩壊。七月二十五日、久米鍛冶救難の右岸荒谷部落の人が、帰途、高磯山北斜面に地割れが



あり、崩壊寸前であることを発見。大声で荒谷および対岸の春森部落に知らせようとしたが目的を達せず。午前一一時または正午頃、大音響とともに崩壊。荒谷・春森の人家十数戸、六〇余名を埋没した。崩壊物質は那賀川をせき止め、湛水は一時間〇・六呎(二尺)の割合で上昇したといわれる。このため、上流では田畑が水没、家屋は浮上し住民は高所へ避難して夜を明かした。

一方、下流では、天然ダム形成により急激に減水した。しかし、いつかは決壊し、大被害を蒙る恐れがあるので、宮浜村役場より飛脚をもって急報した。この日の徳島市の降雨は五〇・一蕨。七月二十七日、午後四時頃天然ダム決壊し、怒涛は下流へ押寄せ、通報は鉄砲・半鐘・太鼓などで直ちになされたが、各地に大きな被害を生じた。

2 崩壊と天然ダムの規模

崩壊地の平均の長さ・幅・厚さをそれぞれ五〇〇呎・三〇〇呎・二〇呎とすれば三〇〇万立方呎となる。一方、後述の天然ダムの規模から崩壊直後の地形を復元し、その量を求めると約四三〇万立方呎となり、小見野々ダム建設以前の長安口貯水池平均堆砂量の約一四年分にあたる。

高磯山の崩壊物質は、那賀川を越えて対岸の春森にせりあがり、最高所は標高二九三呎に達した。これは現在の国道より五七呎、河床より一一三呎の高所にあたる。天然ダム湛水面の最高水位は、少なくとも二五一呎、河床より七一呎の高度に達していた。ダムによる総湛水量は約七、二五〇万立方呎となり、一九七九年一月末の長安口貯水池容量四、六二四万立方呎の一・五七倍に相当する。なお、湛水面積は約三・二平方蕨で、湛水域の最上流は、上那賀町白石および木沢村追立ダムとなる。

3 天然ダムの決壊と下流への影響

決壊の時刻は「午後二時頃から崩れはじめ、午後四時に決壊した」というダム下流四蕨の谷口部落の住民の口伝が事実に近いようである。鶯敷町のヒグレ峠では、午後五時に空砲で出水を知らせ、数十分ならずして濁流が押寄せて

いる。濁流は、阿南市十八女町では暗くなる一時間ほど前に、同中大野町では「日が暮れてから牛が流れるのを見た」とか「避難先の山の上から家の灯が見えた」といわれている。七月二十七日の日没は、徳島市で一九時八分（一九七九）であるから、ダム決壊は午後四時頃、相生町野野で同五時頃、鶯敷町で同六時頃、十八女町で同七時頃、中大野町で同八時〜八時半に濁流が押し寄せたと推定される。すなわち、天然ダムより河口まで約六七詰を五〜六時間で流下しており、流速平均一〜一三詰（毎時）となる。

最高水位は、天然ダム下流一詰の大戸では四一詰、七詰下流の小計で三一詰に達した。荒谷出水以後、那賀川では大正七年（一九一八）の洪水を最大とするが、当時の水位は小浜で二〇・六詰である。下流の中大野町でも、荒谷出水が一九一八年洪水水位より約一・三詰高い。ただし、鶯敷町の一部および阿南市細野では後者が高く、ことに細野ではその差約二詰である。この違いは、和食盆地の存在と荒谷出水の性格、すなわち通常の洪水に比べ、下流で著しく水位が低下することに関連すると考える。水位低下の原因は、天然ダム決壊が降雨のピークより三日も遅れ、下流の支川の流量ピークと相当ずれていたこと、本流の水位が著しく高く支川へ逆流したこと、および盆地の遊水池化に求められる。ダム下流四詰の古屋谷川では、合流点から一・五詰の古屋神社まで遡上し、鶯敷町の中山川でも一・六詰逆流した。

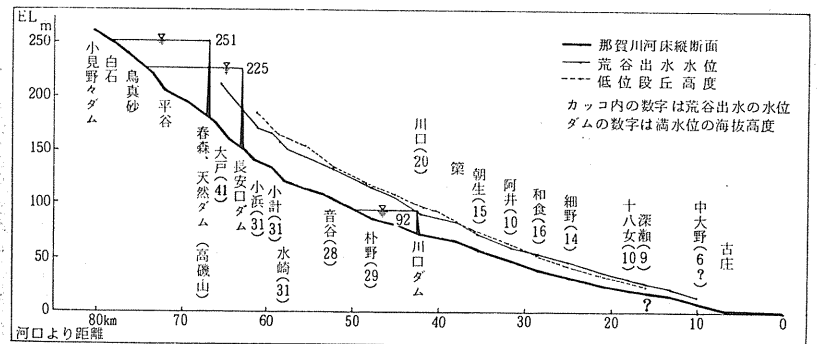
高磯山崩壊による直接の被災は、荒谷・春森両部落の壊滅であるが、天然ダ

ム形成および決壊のため、上流の一五〇余戸が浮上流失し、また田畑が荒廃した。出水により最大の打撃を受けたのは鶯敷町で、流失家屋八一・全潰家屋二九・半潰六二・浸水三二・水死三名の被害があった。その他の家屋流失は、大戸の三五戸のうちの大半、水崎大戸・相生町川口一二戸、阿南市深瀬町の数戸が主なものである。また、旧中野島村では一〇〇余戸が浸水した。耕地の冠水、護岸石垣等の崩壊、道路の破壊、橋の流出等は流域各町村に共通した被害である。

ここで注目されるのは、ダム上流浸水域や下流の鶯敷町以東で大きな被害を蒙ったのに、中間の上那賀町東部および相生町では人畜に被害なく、流失家屋も少ない事実である。これは、中間では、那賀川が深い溪谷を流れ、集落・耕地の多くは、河床より三〇〜四〇詰の比高をもつ低位段丘上にあるという、地形的特性に起因する。段丘の高さが急減する相生町築より下流では、段丘面高度が出水時の水位以下の所が多く、冠水しやすい上に、鶯敷町北方を通る横谷がネックとなり、水位を高めたため被害を増大させたものであり、同様なことが、一九七一年（昭和四六）年八月二十八日〜九月一日の台風第二三号による鶯敷町の水害でも見られる。

4 高磯山崩壊の原因

崩壊の範囲は、標高六〇〇〜七〇〇の山頂にまでおよび、基盤に達していることは、残された山頂がナイフリッジようを呈し、また、春森側に押上げられた径五詰内外の多量の岩塊より明らかである。崩壊の原因として、①仏像構造線がすぐ南を通っていること、②北に急傾斜する脆弱な頁岩がち互層が、構造線近くのため破碎されて、層間に近い形で発生した、③那賀川の攻撃斜面に位置し、側方浸食により急斜した脚部が存在すること、④山腹の平均勾配が三八度以上に達したこと、⑤過去の地沈みあるいは崩壊による厚い堆積物が存在したこと、⑥暴風雨が来襲し、ことに長時間にわたって強雨が続いた。この雨で高磯山以外にも、各地で多数の崩壊が発生し、海部郡川上村保瀬（現海南町）では、二十五日午前十時頃崩壊が起こり、四七人の死者を出している。木頭村平での一九七六年九月の台風一七



荒谷出水の水位と低位段丘高度 (阿南高専 寺戸恒夫氏原図)

号に伴う崩壊と同様に、大規模な崩壊が降雨の末期に発生していることは、注目すべきである。高磯山崩壊の場合、以前から降雨あるごとに、川辺に水が吹き出しており、崩壊三日前から付近の泉が白濁したといわれるから、すでに緩やかな動きをしていたものが、最後に大崩壊を起こしたといえる。さらに、高磯山崩壊の考察は、貯水池周辺の地沈りおよび崩壊を考へる際に、重要な手がかりを与えるものである。

〔参考文献〕(本文中でふれたもののみを挙げる)

- 石田 啓祐(一九七〇) 四国東部の秩父累帯中・古生界層序のコンドントと紡錘虫による再検討、地質雑八三巻、二二七—二四〇頁
 石田 啓祐(一九七〇) 四国秩父累帯南帯の研究(その2)——徳島県長安口ダム周辺の層序と構造、徳島大学教養部紀要(自然科学)第二二巻、六一—九二頁
 市川浩一郎・石井健一・中川衷三・須鎗和巳・山下昇(一九七三) 坂州不整合について——徳島県那賀郡坂州村付近の団体研究、徳島大学学芸紀要(自然科学)三巻、六一—七四頁
 小林 貞一(一九七〇) 日本地方地質誌「四国地方」、一三三頁
 東明 省三(一九七〇) 徳島県の四万十帯より産出した化石、地質雑六四巻、九五—九六頁
 須鎗 和巳(一九七〇) 徳島県加茂谷付近の地質、徳島大学学芸紀要(自然科学)五巻、九四—一〇一頁
 SUYARI, K. (一九六九) Geological and paleontological studies in central and eastern Shikoku, Japan, Part I, *Geology, Jour. Gakugei, Tokushima Univ., Nat. Sci., Vol. 11, pp. 11—76*
 寺戸 恒夫(一九七〇) 徳島県高磯山崩壊と貯水池防災、地理科学一四号、二二—二八頁
 中川衷三・阿子島功・岩崎正夫・須鎗和巳・寺戸恒夫(一九七三) 徳島県の地質(一五万分の一徳島県地質図説明書)、徳島県
 中川衷三・中世古幸次郎(一九七〇) 四万十層群の放散虫化石(予報)——四国東部の四万十帯の研究、その3、徳島大学学芸紀要(自然科学)二七巻、一七—二五頁
 平山健・山下昇・須鎗和巳・中川衷三(一九七三) 徳島県剣山図幅および同説明書、徳島県
 〔追記〕なお、高知県香美郡香我美町末延地域および南国市十市と高知市池にまたがる地域で、四万十帯の北縁部の石灰岩体から、後期トリアス紀型コンドント化石 *Metapolygnathus abneptis* (HUCKRIEDE) が発見されており、(一九七〇、大和大学研究グループ)、本県内でも、四万十帯北縁部の泥質岩中の石灰岩体から、コンドントが発見される可能性がきわめて大きい。

第四章 治安・警察

第五節 災害

一 はじめに

災害には、自然災害と人災がある。その原因として前者は地震および土地の崩壊や暴風雨などがある。

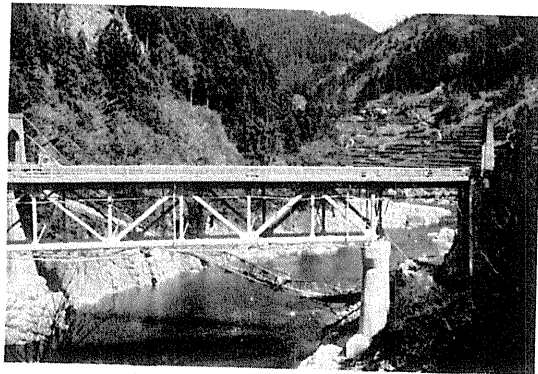
人災には一般に火災が最も多いが、公害・交通災害も大きなウエイトを占めるようになったのも現代社会の大きな特色といえよう。

本町の災害には暴風雨による被害、洪水による家屋・田畑・作物の流出、その他に山崩れ火災などがあり損害をうけている。

昔から災害による被害の歴史には悲惨なものがあり、今日においても語り草となっているが、その主なものを年表で記してみると次のとおりである。

上那賀町における災害

災害年月日	災害事項	資料
承応元年八月(一六五〇)	柳瀬部落裏山大崩壊 民家六戸埋没	柳瀬部落誌



壊れた柳瀬橋(昭40.3)

市の降雨は五〇・一ミリ。

七月二十七日 午後四時ごろ天然ダム決壊し、怒濤は下流へ押寄せた。通報は鉄砲などで直ちになされたが、各地に被

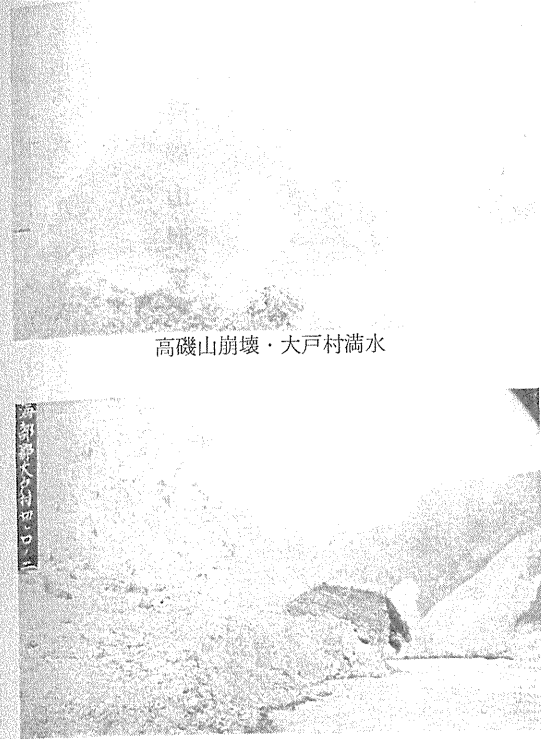
この大災害によって現上那賀町に關係する地域住民の死亡は、その数六〇余名と伝えられており、被害の大きさが想像できる。この災害に、皇室から侍従を派遣し金毫封が下賜された。

(二) 災害後の復旧工事

明治二十五年七月、高磯山が崩壊し那賀川を堰き、決壊前後を通じて流域一帯の人家、人畜をはじめ大被害をもたらしたことは、記録などで明らかにされている。

しかし被災後の復旧の状況については何の記録もないが、平谷宮本明家に保存された一部資料によると、災害の翌年である明治二十六年三月から七月にかけての諸品御通・諸品渡帳や人夫帳・鍛冶細工日役帳・人工控帳がある。

記録されたものによると、復旧作業には近在はもとより上流、下流周辺から大勢の出夫のあったことが伺われる。諸品御通帳によると、土木工事何某・平谷土



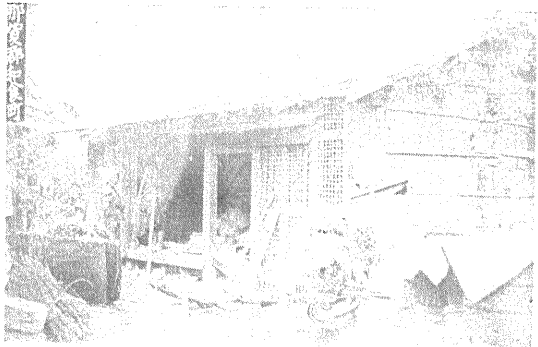
高磯山崩壊・大戸村満水



大戸村切れ口



大戸村家屋浸水



下流和食の被害

ただだけに長い月日と多くの労力を要したことに違いないのである。なお、写真は斎城家所蔵のものである。

(三) 高磯山崩壊時隣村の協力

明治二十五年七月二十五日高磯山崩壊による大災害の際、中木頭村における水害もまた大であった。その時の中木頭村長の不在を聞き上木頭村長和田省一は自村の人びとを指揮し災害救助に尽力した。この功労を多とし時の奥知事より感謝状が送られた。内容次のとおり。

客年七月二十五日海部郡下木頭村大字大戸村ノ山岳崩壊ノ為メ那賀郡那賀川ヲ堰止メ其上流ノ瀧水中木頭村大字平谷村

大殿村御所谷村文ヶ谷村等ニ氾濫逆流シ人家大率浮泛流亡セントスルノ危急ニ迫リ而テ会々隣村中木頭村長ノ不在ナルヲ

聞キ直ニ自村ノ人民ヲ誘導指揮シ且私財ヲ以テ数多ノ人夫ヲ備ヒ以テ食物ヲ運搬シ其被害ノ各村へ出張協力シ其將ニ流亡セントスル所ノ家屋ヲ繋留メ或ハ窮民ニ食物ヲ配与シ一時ノ飢餓ヲ救ヒ幾多ノ被害人民ヲシテ人命ト財産トヲ保全スルヲ得セシメタルハ嘩竟足下ノ危ニ迫リ変ニ処シ能ク周旋尽力セラレタルノ功ニ依ラスンバアラス是レ為邦家不堪満足之至茲

四 高磯山荒廢林地復旧工事

明治二十五年七月、高磯山が崩壊してから四十余年後の、昭和十二年十一月二十八日、現地春森の積において荒廢林地の起工式が行われた。時の村長、藤林芳蔵をはじめ隣接関係保村長等多数参列し、犠牲者となった人々を慰霊し、治水・水利の安全と林業の振興・産業の發展を祈つて式を終わった。

この工事は、昭和十二年から四か年の継続事業であつた。工事費拾数万円で多くの人夫が従事した、その後も治水の工事が行われたと聞くが、現在は植林され荒廢地のおもかげはない。

(五) 記 録

高磯山崩壊について『明治式拾五年度徳島県大洪水外諸県水災諸國之火災』（原本は阿南市桑野町川西西崎憲志所蔵）の記録は次のとおりである。

南三ヶ郡惨状

辰七月二十三日ノ暴風雨及津浪ハ他郡ニ於テ被害シトイヘトモ而シテ三郡ノ大被害地ニ就テ之レオ云ヘハ木頭山分オ以テ第一点之レニ次クオ勝浦郡旭トシ木頭山分ト旭ノ過半ハキウタイニ復クスル能ハスシテ疲備セリ和食ハ第三位ノ被害ト云フ時日オツヒヤセバ旧態ニ復スルノ期アルノミナラス

山嶽崩レテ人共二死ス

七月二十二日ヨリ大雨ノタメ二十五日正午十二時頃海部郡木頭村字御所谷三文坂峠高サ凡三百間程崩潰シ海部郡中木頭村荒谷口川（那賀郡水源）ニ土砂高サ五十余間程タイセキシ木字坂州村迄河水漲溢シタメニ人家四十余戸流失死人二十七人見込ナルカ只今ノ処ニテハ水際ヨリ土砂堆積ノ頂上迄二十

余間アレドモ洪水割合一時間ニ二尺ノ高ク増ス有様ナレドモ湛時決潰スルモ計万一決潰ノ不幸見ルトキハ下流ニ位スル各村ハ非常ノ水害オ蒙ルベク村民等ハ昨日ヨリ悉皆高山ニ登リテ難ヲ避ケ居ルトノ旨

崩壊タル山岳

高磯山ノウチ波出岡ツ、ミ兩名ノ山岳オ合セ高サ四百五十間其ノ幅ハ山上ニテ九十五間山麓ニテ式百五十間オ山壊シタリ屢々見聞スルトコロナルガ此ノ巨大ナル山岳ノ形如何アリシヤトイフニ即チ略図ニ示セル如ク点オ以テ分界シタル頂上ヨリ右ノ方ナル登リ六丁ノ一峰ト次ノ登リ四丁ノ一峰オ合セテ崩壊セシモノニテ二峰ノ間ニ少シク凹ノル所オ数丁歩ノ田畑オ拓キ得ベカリシ平坦ナル土地アリ而シテ二峰ノ山腹ヨリ麓ニ至ルマデ及ビ那賀郡川沿岸平坦ノ地ハ総テ田畑トシテ村民生計ノ以テ繫ル所トナル故ニ此ノ地方指シテ大戸ノ砲厨トイヘリ蓋シ大戸一村ノ所得ハ重モニ此ノ田畑ニ在ルオ以テナリト其砲厨ハ今回ノ大変ニテ跡形モナク埋没又ハ崩壊シ去ラレ新タ一丘阜オ築キセリ嗚呼大戸村民ハ耕スヘキノ田畑ヲ失ヒ加フルニ家ナク衣ナク食ナクシテ饑餓將ニ目下ニ迫ントス身親シク其地ニ接シ慘状荒涼タルノ悲境オ看来タリ仔細ニ之レオ写サントシテ子ニ其ノ筆キオ憾ムナリ而シテ高磯山ノ一半ハ青蒼タル森林ト共ニ崩壊シテ一ノ峭壁ヲ造出シ現存スルモノハ「松ガタラ」「佛ガタラ」ニ所ノミ（タヲトハ嶮シカザラザル坂路オ云フガ如ク也）

大戸村山岳崩壊

下木頭村字大戸村山壊ノ如キハ其実ニ毛髮悚然トシテ三伏ノ炎暑却テ肌ニ粟オ生スルオ覺ユルナリ山崩ハ幅三百余間高サ四百余間アル崩潰ニ際シ空氣劇動シ対岸（那賀郡分）人家十七八戸ハ空中飛散シ去リ数十余間の外ニ落チタリト云アリ又本月二十七日午後六時頃ニ至リ終ニ山崩ニ決潰セシモノト見（川口（地名）兩岸ノ人家十二戸（吉野郵便局及宿屋）ハ俄然大水来リテ流亡セリ川口ハ崩所ヨリ凡八里余下流ニ在ルニ其惨害尚此ノ如シ下流那賀川第一般ノ被害実ニ思ヒ□レルニナリ川口日佐へ最近ノ地ナルオ以テ早クステニ之オ身ニスルコト得タルモ尚ホ非常ニ案セララルルハ中木頭村ナリ郡吏其他ノ人々モ出張中ナレトモ未タ何レヨリモ更報ナシ僅カニ下木頭村ノ山上ヨリ眺メ見ルニ少ナクモ三百五十余戸ノ人家ハ數二十余間ノ水底ニ埋没セラレシナルヘシト云ヘリ山崩多シト雖モ大河オ横断シ急流オ堰止メ高サ百余間ニ至リシカ如何ニ大変オ云他ニ比ナカルヘシ

那賀川筋才堰止メタル所

高磯山麓ハ直チニ那賀川ノ流レニ接シ川オ隔テ恰カモ堀風ヲ立テタル如キ断涯アリ之レオ奥春森トス高磯山ト相對シテ距離川數オ併セテ一丁余ナルカ然ルニ七月二十五日高磯山ノ崩壊ト共ニ高サ百數十間ノ新ラシキ小山生シテ高磯春森間ト連絡シ那賀川ノ激流ト一時堰止メタリ平時ハ水量甚タ深カラサル同川筋モ二十二日己来ノ大雨ニテ水量漸次加ハリ二十五日崩壊ノ頃ニ至リテハ一丈有余ノ増水トナリ激流奔湍矢オ射ル

四十六年発生の宮浜中学校ならびに上那賀町役場の火災も大きいものであった。以下町内での大きかった火災について記録する。

(一) 東尾の火災

大正七年一月二十四日東尾村の大火災である。午前一〇時ごろ、村の西方の山林で山作業をしていた人が、食事の湯を沸かしている間に失火したらしく、火は干天続きで渴ききった付近の草原に燃えうつり、更におりからの激しい師走の風にあおられながら、魔の火となって荒れくるった。草葺の屋根から屋根へ、火をつけて回るような早い速度で村全体に燃え広がり、遠く離れた三戸を残して全村一八戸のうち、一五戸を数時間にして焼き尽したのである。

当日豊小学校に行っていた六名の生徒は、燃えてゆく家や山を見ながら家に帰らず、先生の命によって引返し、寒さと不安にふるえながら学校で夜を明かした。二日二晩燃えつづけ約一千町歩の山林を焼きつくし、夕方になりほとんど鎮火した。(当時在校生の語るところによる)

(二) 横倉山・下司山の大火事

昭和三年二月二十五日、平谷字横倉山の村道松久保線付近から出火、当日は北風強く火は瞬時にして燃え広がり、飛火の状態で堂ノ尾山から下司山まで延焼したが、地元消防組をはじめ、鷺敷町以西各村消防組の応援、消火活動によって、火事は翌二十六日夕刻に鎮火したといわれる。

二日間の大火事につき、消防組員の炊出は平谷街筋婦人総出で行われたという。出火原因は、帝国陸軍徳島部隊機関銃隊が近日中に来村すること、村道の改良工事中、その岩石爆破のダイナマイトの飛火が落葉に着火したものと発表されている。災害の状況は次のとおりである。

- 一 山林、田畑の焼失面積一〇〇町歩以上
- 一 一 人家納屋等の災害ノ住宅一戸・納屋一棟・牛舎一棟
- 一 一 人畜の災害ノ牛一頭焼死

(三) 延焼山火事被害

昭和十八年五月十日に、現相生町に発生した山火事によって、上那賀町水崎の通称フタマタに延焼による被害を生じた。田村喜侯の日記によると、次のとおりである。

昭和十八年五月十日(晴天)

動す。

本日午前一〇時頃より日野谷村蔭谷方面より出火、山林は延々として拡がり宮浜村水崎向二ツ又と称する山林まで延焼し来たり、遂に午後二時頃木村(中木頭村)警防団にも応援を依頼し来たりしたため、午後三時トラックにて二十余名出

午後四時頃水崎現場に到着したるに火勢下火となり、山頂に至りて火道を切り迎火防火溝にて最後のとどめ、見事に消して直ちに引揚げる。

(四) 宮浜中学校・上那賀町役場火災

昭和四十六年六月八日未明、宮浜中学校から出火、同校本館など四むねと隣接の上那賀町役場の庁舎一むねを全焼した。午前二時ごろ宮浜中学校東南校舎にある給食、用務員室付近から出火、木造二階建の同校舎(延べ二四三平方呎、給食・用務員・宿直・保健・被服の各室)を焼き、火はさらにむね続きの木造二階建本館(延べ八五八平方呎、六教室と校長・調理・図書・理科の各室)別むねの鉄骨平屋建て工作室(一〇一平方呎)木造平屋建体育倉庫(五〇平方呎)の計四むね、一、二五二平方呎を全焼、さらに同中学校に隣接している上那賀町役場に燃え移り、木造二階建ての庁舎(延べ四三七平方呎)を全焼して午前四時すぎ鎮火した。村当局の推定だと損害は約五千万円、現場検証は午前一〇時半ごろから長江県刑事部長・阿部警務署長らが指揮、約三〇人の関係署員を動員して夕刻まで綿密に行われた。一方町当局は午前八時から現場近くの阿南農林事務所林務課庁舎で緊急町議会を開き対策を協議した。

この結果次のことを決めた。

- ① 九日から町福祉センターの平谷支所で役場事務をとる。を再開、三四〇万円で校庭に広さ一九八平方メートルのプレハブ校舎二むね(五教室と教員室)を建てる。
- ② 宮浜中は十日から類焼をまぬがれた講堂兼公民館で授業

この火災で町役場、学校とも重要書類をほとんど焼失したが、午後四時頃役場の焼け跡にころがっている金庫を見つけたところ、現金七万円・国民年金証紙などともに参院選徳島地方区、全国区の投票用紙各三、四〇〇枚がそのまま残っていた。しかし選挙人名簿が焼失したため、町では宮浜農協や相生町、木頭・木沢村職員に応援を求め、十日までに住民基本台帳をつくり、これをもとに人名簿を作製して二十七日の投票に間に合わせることにした。

宮浜中学校と役場が全焼した、いずれも老朽の建て物で、あっという間に燃え広がり、手のほどこしようがなかった。学校では二日間臨時休校し、しばらくは焼け残った講堂兼公民館などで授業をしたが、登校した生徒や先生たちは焼け跡を見つめてただぼう然。役場では跡始末の対策に明け暮れた。

消火には地元消防団員約一五〇人（うち相生町消防団員約五〇人）と付近の人たち約五〇人がかけつけ、ポンプ六台が出動した。だが水は農用水が十分あったものの、火の回りが早く中学・役場ともに燃え広がる一方。南側の鉄骨二階建ての講堂（階下は公民館）と、幅約八畝の国道ぞいに立ち並ぶガソリンスタンドや民家約三〇戸などへの延焼を食い止めるのがやっとで、一時は上那賀病院の入院患者も避難した。

火の回りが早かったのは、中学校は二十八年四月、町役場は長安口ダムの建設事務所として二十六年に建築された老朽の木造建てだったためで、いずれもたびたびペンキを塗り替えるなどしていたので、いっそう火勢を強めたとみられている。